

『源氏物語』の翻読語と文体

——連文による複合動詞を通して——

藤 井 俊 博

はじめに

古典語の複合動詞（動詞＋動詞）は、前項後項がさまざまな意味関係で結合する。本稿で検討するのは複合動詞の中でも同義的結合の例である。同義的結合の複合動詞は、本来の日本語にない結合形式であって、漢語の翻読語として形成される場合が大部分であるため、漢文的要素の影響を測る指標として重要である。

筆者は、藤井（一九八九）藤井（二〇〇三）で古代の宣命や『今昔物語集』など漢文を翻案して書かれた文章に漢語に基づく翻読語が多いことを指摘した。また、藤井（二〇一八a）では、『万葉集』から20語の翻読語（同義的結合の複合動詞）を指摘した。さらに藤井（二〇一八b）では、同義的結合の複合動詞は、同義的な漢字の結合したいわゆる「連文」の漢語を直訳した翻読語が多くを占める

ことを明らかにし、「きたる（来至る）」をはじめとする和漢混淆文の指標となる特徴語を抽出した。具体例として、連文の漢語「厭足」「飽足」によって生じた翻読語「あきだる」を取り上げ、これが柿本人麻呂の和歌で発生し、平安時代にかけて定着していった過程を考察した。これらを通じ、文体研究の上でこれまで気づかれていなかった観点として、同義的結合の複合動詞の翻読語が有効な観点であることが明らかになってきた。

本稿で取り上げる『源氏物語』は、純粹な和文体とみることに疑問がもたれ、相当程度に漢語・漢文によるな表現を取り入れていると予測される。本稿では、いわゆる連文を直訳してできた複合動詞による翻読語を取り上げて検討したい。^①

一 対象とする複合動詞と分類方法

本稿では、『源氏物語』の複合動詞を「中納言」（日本語歴史コーパス CHJ）の長単位検索を用いて調査する。索引類では、ある程度定着した一語的な複合動詞が採られ、一回的・臨時的な複合動詞、あるいは語としてのまとまりの弱い句的な表現は採られない。しかし、長単位検索によることで、動詞の連接箇所を悉皆的に抽出することができ、これは、『源氏物語』の文体的特徴を明らかにしようとする本稿の目的にとって有効である。

『源氏物語』（大島本を底本とし青表紙本で校訂した新編日本古典文学全集本）の動詞を長単位検索により検索すると、異なり語数で448例が抽出できる。これは『日本古典対照分類語彙表』（以下「語彙表」）の複合動詞3794例に比べ354例も多い。以下これを、出現状況によって次のように分類する。

- A) 語彙表で複数作品に見られる例
- B) 語彙表で源氏物語のみ見られる例
- C) 語彙表に見られない例

A) の例は、複合動詞として定着し、ある程度固定的になっていると思われる複合動詞である。B) の例は、語彙表（青表紙系統本を底本とする『源氏物語大成』の索引による）にとられた点で複合

動詞の扱いがなされていると言えるが、他作品に見られないため『源氏物語』で独自に生み出された蓋然性が高いものである。C) の例は、語彙表で複合動詞としてとられず、二語の結合として分離して把握された句的なものが多いと思われる。これも臨時的に作者が生み出したものであり、『源氏物語』の独自の文体に関わるものとして注目できる。本稿では、B) C) のような『源氏物語』に特徴的に見られる具体例に注目して考察する。

本稿で検討する複合動詞は、意味の近い動詞を繰り返した複合表現で、前項後項の意味の差が小さいと判断される同義的結合を主とし、意味の差の大きい類義的結合や反義的結合を含めて検討する。同義的結合の例は連文による翻読語が多く含まれると予測されるので、いくつかの代表例によって検討する。類義的結合の複合動詞は、従来『源氏物語』の文体的特徴の一つとされている「形容詞＋形容詞」の句との関連を考察する。その他、反義的結合や同語反復の例も漢語との関係が予測されるため調査に加えた。これらを通じ『源氏物語』が『白氏文集』などの漢語を応用的に利用した独自の翻読語を生み出している可能性を指摘する。

二 長単位検索による複合動詞の概要

『源氏物語』の動詞を長単位によって検索して得た448語から、同

義的結合・類義的結合・反義的結合の複合動詞を抽出すると、異なり語数で総計316例が見られる。その内訳を(表1)に示しておいた。「源氏物語」の独自性を示すと思われる「源氏のみ」の語94語と、「語彙表になし」の語145語の総計239語は、総数316語の76%を占める。「語彙表になし」の意味別では、同義的結合の「源氏のみ」と「語彙表になし」のような「源氏物語」に独自と思われる語は合計85語で、総計127語の67%を占める。類義的結合でも、同87%で、「源氏物語」作者は同義的結合や類義的結合の複合動詞を積極的に作り出している。

平安時代の複合動詞は、動詞を自由に結合し作り出す面があるため、現代語のそれとは異なって結合が弱い面が指摘される。しかし、

(表1) 異なり語数による使用度数

	複数作品	源氏のみ	語彙表無	合計
同義的結合	42	54	31	127
類義的結合	22	37	108	167
反義的結合	13	3	6	22
合計	77	94	145	316

(表2) 延べ語数による使用度数

同義的結合	類義的結合	反義的結合
510	325	107

漢語の少ない時代(あるいは文体)にあつて、漢語による複合動詞は表現のための語彙を豊かにするのに有効な手段であつた。同義的結合や類義的結合では使用度数が少ない例が多く、使用度数1のものが69%(異なり語数127語中88語)、類義的結合の例では同86%(異なり語数170語中147語)に上る。使用度数の少ない例は臨時的に作られたものと思われる。

延べ語数の面から見ると、総数15265例であるのに対して、同義的結合・類義的結合・反義的結合の複合動詞の総度数は942語である。その内訳を(表2)に示した。

延べ語数から見ると、類義的結合よりは同義的結合の例が多く、比率からすると反義結合も多い。反義結合の例が多いのは、「明かし暮らす」20例、「出で入る」15例、「起き居る」14例、「遅れ先立つ」9例、「聞こえ承る」8例など使用度数が高い語を含むためである。同義的結合の使用度数が高いのは、固定化したA)の例が多いためである。使用度数が特に高い「いでく」「おしはかる」等は和漢混淆文において頻度の高い語であり文体的特徴の指標となるが、これら高頻度語については別稿で考察したい。

三 同義的結合・類義的結合・反義結合の複合動詞

次に、(一) 同義的結合の複合動詞、(二) 類義的結合の複合動

詞、(三) 反義結合の複合動詞について、A) 語彙表で複数作品に見られる語、B) 語彙表で源氏物語にのみ見られる語、C) 語彙表に見られない語に分け、抽出された全例を挙げておく。括弧内に用例数と漢字表記を示す(□は漢字が当てがたい例)。

(二) 同義的結合の複合動詞 (127語)

A) 語彙表で複数作品に見られる例 (42語)

いでく (124 出来) ・おしはかる (87 推量) ・おひいづ (51 生出) ・うけひく (18 承引) ・えりいづ (13 選出) ・きえいる (13 消入) ・すぎゆく (10 過行) ・うつふしふす (9 伏臥) ・とひきく (9 問聴) ・ゆきかよふ (6 行通) ・たえいる (5 絶入) ・きえうす (4 消亡) ・おこなひつとむ (3 行動) ・ともしつく (3 灯点) ・にげかくる (3 逃隠) ・あそびたはぶる (2 遊戯) ・おどろきさわぐ (2 驚騒) ・ちりみだる (2 散乱) ・なげきしづむ (2 歎沈) ・のこりとどまる (2 残留) ・をしみあたらしがる (2 惜惜) ・〈以下一例〉いたりつく (到着) ・うちとけむつぶ (解睦) ・うつりゆく (移行) ・うばひとる (奪取) ・うれへなげく (憂歎) ・おいおとろふ (老衰) ・おいかる (老枯) ・おいくづほる (老類) ・こひねがふ (請願) ・こひかなしむ (恋悲) ・しにける (死入) ・たづねとふ (訪問) ・つきはつ (盡果) ・つくしはつ (盡果) ・つげしらす (告知) ・とぶらひみる (訪

見) ・とりおこなふ (執行) ・ののしりさわぐ (罵駭) ・はなちやる (放遣) ・ひかりかかやく (光輝) ・まねびにす (学似)

B) 語彙表で源氏物語にのみ見られる例 (54語)

おいしらふ (7 老痴) ・あへしらふ (4 応答) ・いとひはなる (4 駭離) ・のこりとまる (4 残留) ・あがめかしづく (3 崇寵) ・あひしらふ (3 応答) ・いだしはなつ (3 放放) ・おちはばかる (3 畏憚) ・やせほそる (3 瘦細) ・もてなしかしづく (2 以成寵) ・なれむつぶ (2 馴擾) ・ならひまねぶ (2 習学) ・なでかしづく (2 撫寵) ・かくろへしのお (2 隱忍) ・かくれしのお (2 隱忍) ・うけたまはりつたふ (2 承伝) ・いとひすつ (2 厭捨) ・あらはれいでく (2 現出来) ・〈以下一例〉あかれちる (分散) ・あつかひうしろみる (抜後見) ・いたはりかしづく (勞傳) ・いつきかしづく (傳傳) ・うれへなく (憂泣) ・えらびいづ (選出) ・えりいだし (選出) ・おちあぶる (落溢) ・おちぶる (落溢) ・おとづれよる (訪寄) ・おとづれく (訪来) ・おどろきおつ (驚怖) ・おどろきまどふ (驚惑) ・かしづきあがむ (寵崇) ・かよはししる (通知) ・くみはかる (酌量) ・こひかなしぶ (恋悲) ・しづめまもる (鎮護) ・ただよひさすらふ (漂浪) ・たづねとぶらふ (訪問) ・ちかづきよる (近寄) ・とどろきひびく (轟響) ・なでやしなふ (撫養) ・なよびやはらぐ (和和) ・なれまじらふ (馴交) ・にくみうらむ (憎恨) ・ぬれしめる

(濡湿)・のこしとどむ(残留)・はばかりおづ(懼畏)・ほけしる(惚痴)・まなびしる(学知)・みだれちる(乱散)・むつびなる(擾馴)・もてかしづきあがむ(寵崇)・やつれしのぶ(嬖忍)・わかまへしる(弁知)

C 語彙表に見られない例(31語)

〈すべて一例〉うそぶきずんず(嘯誦)・うちうそぶきくちずさぶ(嘯吟)・ささめきかたらふ(□語)・うちしめりぬる(濕濡)・うつくしびもてあそぶ(愛弄)・うつくしみあつかふ(愛扱)・うらみそねむ(嫉妬)・おとしめそねむ(貶妬)・おどろきかしこまる(驚惶)・おもひあつかひうしろみる(扱後見)・(おもひ)そめはじむ(初始)・かろめあなづる(輕侮)・かろめろうず(輕弄)・かろめあなづる(輕侮)・くゆりかをる(煙香)・せいしさいさむ(制諫)・せめうらむ(責恨)・そばみうらむ(側恨)・ととのへかざる(整飾)・とほしかよはず(通行)・なげきをしむ(歎惜)・なびきしたがふ(靡従)・なびきかしづく(靡寵)・なびきさぶらふ(靡侍)・なびきめづ(靡愛)・のがれそむきはなる(逃背離)・はぢらひしめる(羞湿)・まつりごちしる(政知)・わらひあなづる(笑侮)・ゑんじうけふ(怨誓)・をしみくちをしがる(惜惜)

(二) 類義的結合の複合動詞(167語)

A 語彙表で複数作品に見られる例(22語)

まかづ(44罷出)・まわりく(36参来)・みきく(23見聞)・まうのばる(17参上)・すぐしく(7過來)・とどめおく(5留置)・わたりまゐる(5渡参)・せきとむ(4堰止)・ちかづきまゐる(4近参)・まかりいづ(4罷出)・なげきわぶ(3歎侘)・やせおとろふ(3瘦衰)・あけたつ(2明立)・とぶらひまうづ(2訪参出)・(以下一例)しなえうらぶる(萎□)・しのびやつす(忍嬖)・ただよひありく(漂歩)・なきさけぶ(泣叫)・なきなげく(泣歎)・ならひよむ(習読)・はなちつかはす(放遣)・やせさらばふ(瘦□)

B 語彙表で源氏物語にのみ見られる例(37語)

きき見る(6聞見)・よばひのしる(2呼罵)・まじらひなる(2交馴)・とぶらひまゐる(2訪参)・ちぎりたのむ(2契頼)・そむきすつ(2背離)・ずんじのしる(2誦罵)・こひしのぶ(2恋偲)・(以下一例)うしろみかしづく(後見傳)・おいかがる(老屈)・おちまどふ(怖惑)・おどろきおokus(驚臆)・かよはしわたす(通渡)・さうぞきけさうず(装束化粧)・しつらひみがく(設磨)・しつらひかしづく(設傳)・しつらひすう(設据)・しのびかくろふ(忍隠)・しのびやつる(忍嬖)・しらべととのふ(調整)・そそめきさわぐ(□騒)・そむきかくる(背隠)・そむきさる(背

去)・そむきはなる(背離)・たふれまろぶ(倒転)・ちかひたのむ(誓頼)・とぶらひいでく(訪出来)・ながれうす(流失)・なげきしをる(歎羨)・なりとどろく(鳴轟)・はばかりはづ(憚恥)・みちびきいる(導人)・めであさむ(愛淺)・やせあをむ(瘦青)・よそへなずらふ(寄擬)・よみならふ(読習)・わたり通ふ(渡通)

C) 語彙表に見られない例(108語)

ふうじこむ(3封入)・(以下一例)あはめうらむ(淡恨)・あはめにくむ(淡憎)・いのりかちす(祈加持)・いひつづげのしる(言続罵)・うちしのびやつる(忍罵)・うちずんじひとりごつ(誦独言)・うちけさうじつくろふ(化粧繕)・うちなやみおもやせたまふ(悩面瘦)・うちはなやぎさればむ(華戯)・うちまきしちらす(撒散)・うちませおもひわたる(混思)・うちませみだる(混乱)・うらみそむく(恨背)・えりととのへすぐる(選整選)・えんだちけしきばむ(艶気色)・えんだちいろめく(艶色)・おとなびととのふ(大人整)・おとりけつ(劣消)・おどろきくちをしがる(驚惜)・おぼつかながりなげく(鈍歎)・おもひおとりひけす(思劣卑下)・おもひあがりおよすく(思上□)・おもひかしづきうしろみる(思傳□後見)・おもひつづげながむ(思統眺)・おもひやりうしろみる(思遣後見)・おろしつかはす(下遣)・かうじつかうまつる(孝仕)・かかいしのぼる(加階上)・かかづらひたどりよる(繫辿

寄)・かきたえほのめきまゐる(絶仄)・かきうつ(書打)・かきくらしおもひみだる(搔暗思乱)・かさなりまさる(重増)・かたさりはばかる(片去憚)・かたぶきあやしぶ(傾怪)・かへしたまはる(返賜)・ききわきおもひしる(聞分思知)・きこえさせたまひおく(聞宣)・きこしめしのたまはす(聞宣)・くろみおちいる(黒陷)・くろみやつる(黒襲)・けうじめづ(興愛)・けさうばみなまめく(懸想生)・けしきとりしたがふ(気色取従)・けしきはみほほえみわたる(気色微笑)・けづりつくるふ(梳繕)・こしらへなぐさむ(拵慰)・こしらへなびかす(拵靡)・さくじりおよすぐ(□□)・しなほしひきつくるふ(直繕)・したがひくづほる(従類)・したがひなびく(従靡)・しりととのふ(知調)・しろしめしごらんず(知御覽)・しろしめしととのふ(知調)・しをれしぬ(萎死)・すすめおもむく(勸赴)・すりししつらふ(修理設)・すりしつくるふ(修理繕)・そしりうらむ(謗恨)・たきしめさうぞく(焚染装束)・たちよりとぶらふ(立寄訪)・たちよりのす(立寄□)・たづねかほしいふ(尋交言)・たまはりあづかる(賜預)・ついせうしつかうまつる(追従仕)・つかはしとぶらふ(遣訪)・つきしろひめくはす(突目配)・つくるひけさうず(繕化粧)・つくるひよういす(繕用意)・つくるひみがく(繕磨)・ととのへみがく(整磨)・ながらへとまる(長止)・なぐさめまぎらはす(慰紛)・なげきいとほし

がる(歎□)・なまめきわかぶ(生若)・なりかはる(成変)・のたまはせおほす(宣思)・はしたなめさしはなつ(端無差放)・はしたなめわづらはす(端無煩)・はづかしめうらむ(辱恨)・はつれそそく(□□)・はなちたまはず(放賜)・はばかりまめだつ(憚□)・はらだちゑんず(腹立怨)・はらだちうらむ(腹立恨)・ひきいりしづみいる(引入沈入)・ひきいりしづむ(引入沈)・ひきつくろひかざる(繕飾)・ひきつくろひけさうず(繕化粧)・ふきふぶく(吹雪)・まありちかづきなる(参近馴)・みいれかずまふ(見入敷)・みいれつしようす(見入追従)・みだれうれふ(乱愛)・みだれうちとく(乱解)・みみふりめなる(耳旧目馴)・めざましがりなげく(目覚歎)・もてけちかろむ(消軽)・もてはなれはしたなむ(離□)・もらしおとす(漏落)・ゆがみよろほふ(歪蹠跟)・ゆしあんず(揺按)・よしばみなさげだつ(由情)・よそひまうく(装設)・よわりそこなふ(弱損)・をしみなげく(惜歎)

(三) 反義結合の複合動詞(22語)

A) 語彙表で複数作品に見られる例(13語)

あかしくらす(20明暮)・いでいる(15出入)・おきゐる(14起居)・おくれさきだつ(9遅先立)・あける(5明暮)・おとりまざる(5劣優)・あけくらす(4明暮)・たたずみありく(4佇

歩)・たち居る(3起居)・ゆきかへる(3往返)・(以下一例)うきしづむ(浮沈)・ねおく(寝起)・みちひる(満干)
 B) 語彙表で源氏物語にのみ見られる例(3語)
 おほとのごもりおく(4寝起)・(以下一例)いだしいる(出入)・ゆきめぐりく(行巡来)

C) 語彙表に見られない例(6語)

きこえうけたまはる(4聞承)・(以下一例)うかべしづむ(浮沈)・おきふしなびく(起臥靡)・きこえさせうけたまはる(聞承)・ささちる(咲散)・そうしくだす(奏下)

(一)の同義的結合とした例は連文の漢語を元に作られた翻読語の候補となるものであり、今後詳しく用法を検討すべきである。(三)の反義結合の語も漢語との関係が多く考えられる。それに対し、(二)の類義的結合の例は「見聞く」のように漢語との関係が考えられるものは少数で、意味のやや離れた語を並列的に組み合わせ、臨時的に作られた句の性格が強いものが大半である。

四 『源氏物語』の翻読語の特質

前節で挙げた(一)～(三)において、A)のように複数作品に見られ、使用度数が高いものがある。一方、B)「源氏物語にのみ見られる語」、C)「語彙表に見られない語」があるが、これらは概ね

『源氏物語』で一例しか見られないものが多い。つまり、『源氏物語』には他作品に見られ例数も多い一般的な語と、他作品に見られず臨時的に用いられた語が含まれるのである。

ここでは、複数の複合動詞にわたって用いた語を含む例に着目し、作者が好んで使用した表現を考えてみたい。次に三節で挙げた語群から該当例を挙げ、B)「源氏物語にのみ見られる例」に*印、C)「語彙表に見られない例」に○印を付して示す。また、関連すると思われる漢語を↓に示し、『六国史』や中国史書・『白氏文集』等から検索される資料名を挙げておく。

- ① あがめかしづく*・かしづきあがむ*・もてかしづきあがむ*・(もてなしかしづく)*
 ↓崇籠(続日本後紀・後漢書・三国志・白氏文集)
- ② いとひすつ*・いとひはなる*
 ↓厭離(白氏文集)
- ③ うらみそねむ○・にくみうらむ*
 ↓嫉妬(日本書紀・史記・漢書・後漢書・三国志・晋書)・怨恨(史記・漢書・後漢書・三国志・晋書・白氏文集)
- ④ うれへなく*・うれへなげく
 ↓憂歎(三代実録・後漢書・三国志・晋書・白氏文集)
- ⑤ えらびいづ*・えりいだす*・えりいづ
 ↓選出(宋史・白氏文集)
- ⑥ おいおとろふ・おいかる・おいくづほる・おいしらふ*
 ↓老衰(後漢書・白氏文集)・老枯(白氏文集)・老耄(三代実録・文徳天皇実録・史記・漢書・後漢書・三国志・晋書)
- ⑦ おぢはばかる*・はばかりおづ*
 ↓畏憚(続日本紀・三代実録・史記・漢書・後漢書・三国志・晋書)・恐懼(日本書紀・続日本紀・三代実録・史記・漢書・後漢書・三国志・晋書・白氏文集)
- ⑧ おどろかさわく・おどろきおづ*・おどろきかしこまる○・おどろきまじふ*
 ↓驚駭・驚怖(続日本紀・史記・後漢書・三国志・晋書)・驚惶(後漢書・三国志・晋書・白氏文集)・驚惑(後漢書)
- ⑨ かろめあなづる○・かろめろうず○・わらひあなづる○
 ↓輕侮(史記・漢書・後漢書・三国志)・輕慢(漢書・後漢書・三国志・晋書)・侮弄(三国志)・嘲笑(魏書)
- ⑩ きえうす・きえいる
 ↓消失(三代実録・宋書)・消亡(史記・漢書・後漢書・三国志・晋書)・消盡(三国志・白氏文集)
- ⑪ しにいる・たへいる
 ↓入滅(史記・白氏文集) ※「たへいる」は「氣絶」「入滅」等

の混淆と見ておく。

⑫ たづねとふ・たづねとぶらふ*

↓ 訪問 (史記・漢書・後漢書・三国志・晋書・白氏文集)・尋訪
(後漢書・晋書)

⑬ なげきをしむ○・なげきしづむ

↓ 歎惜 (日本書紀・三代実録・後漢書・三国志・晋書・白氏文集)・歎息 (日本書紀・続日本後紀・史記・漢書・後漢書・三国志・白氏文集)

⑭ なでやしなふ*・なでかしづく*

↓ 撫養 (続日本紀・文徳天皇実録・史記・漢書・三国志・晋書・白氏文集)・撫育 (続日本紀・日本後紀・文徳天皇実録・三代実録・後漢書・三国志・晋書)

⑮ なびきしたがふ○・なびきかしづく○・なびきさぶらふ○・なびきめづ○

↓ 靡靡 (日本書紀・史記・白氏文集)

⑯ なれむつぶ*・むつびなる*

↓ 馴擾 (後漢書・晋書)

⑰ のこしとどむ*・のこりとどまる・のこりとまる*

↓ 残留 (魏書)

⑱ をしみくちをしがる○・をしみあたらしがる

↓ 惜傷・痛惜 (日本書紀・続日本紀・漢書・後漢書・三国志・晋書・白氏文集)・悼惜 (続日本紀・史記・後漢書・三国志・晋書)

⑩⑪⑬以外の複合動詞は、B) C) の例を含み、『源氏物語』独自の例が多い。これらは『日本書紀』などの日本史書や中国史書、『白氏文集』に見える漢語の対応例が占め、特に『源氏物語』に影響した『白氏文集』に15項目が関わっていることから考えると、作者が漢籍を読む中で覚えた熟語の知識を元にした可能性が高い。例

えば次の例。

○帝よりはじめてたてまつりて、もてかしづきあがめたてまつりたまひしを、人の上もわが御身のありさまも思し出でられて……

(明石)

○昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日のはなほなほしく下れる際のすき者どもに名を立ちあざむかれて……

(若菜上)

○なほ人のあがめかしづきたまへらんに助けられてこそ

(夕霧)

○乃加_二家卿_一、以示_二崇寵_一

(『白氏文集』卷三八「除_二韓華東都留守_一一制」)

『観智院本類聚名義抄』によると、「崇」「寵」に「アガム」、「崇」に「カシヅク」の和訓があり、同義的な両字を結びつけた連文の漢語「崇寵」が『源氏物語』に影響を与えた『白氏文集』に見られる。

これに照らせば、『源氏物語』においては、「崇寵」の直訳形である「かしづきあがむ」に「もて」を加えた「もてかしづきあがむ」、転倒形「あがめかしづく」、句的な「あがめられかしづかれ」などが作られ、さらに「もて」を「もてなし」とした「もてなしかしづく」が生み出されたというように解される。用法面で見ると、『白氏文集』は帝の制詔の例であるが、『源氏物語』でも明石巻で帝の寵愛に用いており、その他、庇護者が大切に養育することに広く使われていることが看取される。

『源氏物語』の翻読語は、漢文の表現を下敷きにしながら、語形や用法を加工して和文的な文体に馴染ませている。以下、右の翻読語の例から窺える語形や意味用法の特質を列記しておく。

- 1) 複数の複合動詞にわたっている要素を含むものほとんどが源氏のみであるか語彙表にない語である。これは同義的結合の複合動詞が『源氏物語』で独自であるものが中核を占め、作者が積極的にこの種の語や表現を生み出そうとしたことを物語る。
- 2) 意味の上では精神的な内容の動詞が多く、『源氏物語』では人物の心理を描くのに漢語の翻読語を多く利用している。後述するように、並立形容詞でも感情・思考に関わる表現が多く、人物の内面を表すのに漢語を基礎にした翻読表現で心理の陰影を描き出そうとした作者の工夫が窺える。

3) 『源氏物語』のみの例には『今昔物語集』などに多く見られる転倒形が含まれる。「あがめかしづく」「かしづきあがむ」、「おちばかる」「はばかりおづ」、「なれむつぶ」「むつびなる」などである。これらは同義的であることの証左である。

4) 「あがむ」「あざける」「やしなふ」のような漢文訓読文に多い語や、「弄ず」のような漢語サ変動詞が含まれ、漢語との関わりを示唆している。

5) 「おどろき」は複合動詞の前項に多く用いているが、この語は『今昔物語集』など漢文の影響が強い和漢混清文で、翻読語「おどろきあやしぶ(驚怪)」をはじめ人物の心理を強調的に表す場面でよく活用される(藤井二〇一六)。「源氏物語」の表現が、和漢混清文のそれに通じる面があることを示す証左である。

6) 「なびきしたがふ(服従する)」「なでやしなふ(慈しむ)」の他、「まつりごちしる(統治する)」「しづめまもる(鎮護する)」「はぢらひしめる(卑下する)」など漢字の語義を踏まえた「意味借用」の動詞を含む例が見られる。出家を表す仏教語「いとひはなる(厭離)」、住吉神社の「しづめまもる(鎮護)」ことなど、場面内容に応じた漢語を和らげて用いた例も見られる。

五 並立形容詞との文体面での連続性

二節で複合動詞の意味別の例数を上げておいたが、複合動詞において注目すべき点は、(一)同義的結合ではC)の割合は24パーセントにとどまるのに対して(二)類義的結合ではC)の割合が65パーセントと極めて高いことであつた。複合動詞の類義的結合が索引にとられにくいのは、同義的結合に比べて結びつきが弱く感じられ、類義語を連接させた句にしか見なせない場合が多いためであらう。つまり、類義的結合の場合は、語と言うよりは動詞の並列した句を作る文体的傾向として解釈されやすい。一方、同義的結合の場合は、漢語を元に行っているため結びつきが強く意識され、一語化した語として解釈されやすいのであらう。

ただし同義的結合の場合にも、B)C)のような「源氏物語」に独自の少数の例では、漢字の訓詁的な知識に基づいて作り出した臨時的複合動詞・動詞句と考えられるものもある。例えば、C)「まつりごちしる」は、連文「政治」の翻読語であらうが、「まつりごと」を動詞化した「まつりごつ」、「知、主也」(字彙)のように治める意味の「知る」を組み合わせて生み出される。「はじらひしめる」の「しめる」は、「湿、謂_テ自卑下如_ニ地之下湿然上也」(荀子注)のように「卑下」の意味があるから「はじらひ」と組み合わせ

たものである。また「なびきたがふ」は、『観智院本類聚名義抄』で「靡 ナビク シタカフ」の和訓があり「靡靡」の熟語で服従の意味もある(『史記』『文選』等)ことから「靡」字を媒介に「なびきたがふ」が生まれたと考えられる。これらは式部の漢語理解の所産として同義的結合を作り出した例であらう。このように、B)C)の語は、『源氏物語』の語彙の特徴であると同時に、漢文的知識を応用した表現の文体的特徴として捉えるべきものが多く存しているようである。

このように同義的・類義的な語を並列する傾向は、すでに『源氏物語』の形容詞において指摘されていて、武田(一九三四)橋(一九七八)松浦(一九七八)山口(二〇一八)らに論がある。橋の論では、武田の言う『源氏物語』作者の文章に見られる「対偶意識」を形容詞の並列において見ようとし、形容詞の類義語(同義語的なものを含む)の並列した例を多く指摘している。山口の論はこれらの使用方法を「並立形容詞」と称し細かく検討したもので、対偶的に語を配置しようとする紫式部の表現を文体的特徴の面から多面的に分析していて有益である。

これらの論では、文構成に現れた文体的特徴として捉えられており、そのような把握に異論はない。しかし、同じ用言の並列であることから言えば、動詞の場合と同じく翻読語の場合を含むことが考

えられる。同義的結合の複合動詞多くが漢語から生じたものとするれば、形容詞においても同義的結合の例は翻読語の可能性があるからである。ただ一般に「形容詞連用形+形容詞」は複合形容詞として扱われない。形容詞では、並列された句表現（山口の言う「並立形容詞」）における漢語の影響と考えることになる。

並立形容詞が漢語を媒介に成立したことは、紫式部の漢文の知識を考えれば十分に想定できよう。例えば、松浦（一九七八）では並列形容詞に多く用いる語として「かなし」を挙げ、「心細し」（9）「あはれ」（7）「恋し」（7）「口惜し・惜し・あたらし」（各6例、3例、3例）「くやし」（3）「心苦し」（3）「心憂し」（2）「つらし」（1）「はづかし」（1）「さうざうし」（1）など24例の語を挙げている。これらは各々「悲摧」「悲哀」「悲恋」「悲惜」「悲悔」「悲苦」「悲憂（憂悲）」「悲辛」「悲羞」「悲涼」（『大漢和辞典』による。傍線は『白氏文集』の用語）など意味の対応する漢語を指摘することができる。

右の中には「悲辛」（つらい）「悲涼」（寂しい）のように形容詞の意味を含む漢語もあるが、その他は概ね動詞的な意味の漢語である。これらの訓読に用いる和語は「こふ・こひし」「惜しむ・惜し」「あはれむ・あはれなり」「くやむ・くやし」「くるしむ・くるし」「はづ・はづかし」「憂れふ・憂し」のように、語根を共有するため

動詞から形容詞への転用が容易なものがあり、「かなしくこひし」（柏木）と「こひかなしぶ」（柏木）「こひかなしむ」（手習）のように形容詞と動詞で両用した例もある。漢語の語形を踏まえつつ、それを加工して利用できる翻読語は、この例のように並列形容詞にも複合動詞にもなる契機がある。

例えば「悲羞」「悲悔」は、『白氏文集』に次の例が見られる。

○潜来更不_レ通_二消息、今日悲羞_レ悔_レ不得

（『白氏文集』卷四「井底引二銀瓶一詩」）

○操_レ之多_二惴慄、失_レ之又悲悔 （『白氏文集』卷六「遣懷詩」）

「悲羞」は「悲しみ羞ぢて帰り得ず」と動詞で訓読できるが、「悲しく恥ずかしくて帰ることができない」と形容詞的な解釈もできる。「悲悔」も「これを失へばまた悲しみ悔ゆ」と訓読できるが、「これを失ったら悲しくて悔しい」と解釈するのが自然である。「悲」のような感情語は、漢文法的には動詞であろうと、解釈上は形容詞的にも理解でき、「悲し（と思ふ）」「悲し（む）」を補えば動詞でも理解できる。「悲羞」「悲悔」も同様であり、次のような並立形容詞を生み出した可能性がある。

○亡き御影どもも、我をば、いかにこよなきあはつけさと見たまふらん、と恥づかしく悲しく思_レせど、…… （宿木）

○思ふさまなりける人をと、わがしたらむ過ちのやうに、惜しく悔

しう悲しければ、つつみもあへず、もの狂ほしきまでけはひも聞
こえぬべければ……
(手習)

宿木の例は、中の君が匂宮の妻に迎えられ、「軽々しき心ども使
ひたまふな……山里をあくがれたまふな」という父の遺言に背き宇
治を出た「あはつけさ(軽率さ)」を恥じる文脈である。直前の地
の文にも「心軽さを、恥づかしくもつらくも思ひ知りたまふ」とあ
る。前掲「井底引銀瓶詩」も、男と潜かに家を出た「軽許(身を
軽々しく人に許す)」を恥じる内容で、『源氏物語』と同じく、親に
背いて家を出た女が顔向けできなくなるという文脈である。この詩
は日本古典作品に多く影響を与えているが、式部愛読の「新樂府」
の一つであり『源氏物語』でも若菜巻の女三宮降嫁の構想に影響し
たことが指摘されている(中西一九九七)。宿木の例も「井底引銀
瓶詩」からの影響が考えられるであろう。

このように同義語・類義語に基づく複合動詞・並列形容詞を多く
用いる傾向は何を意味するであろう。これらの表現は、漢文を典
拠に書かれた上代の宣命や『今昔物語集』のような和漢混淆文に多
く見られる傾向であった(藤井一九八九・二〇〇三)。漢文の学習
は、ある漢字について同義の漢字や和訓を理解する形で進められ、
漢字辞書もそれらの情報を掲示する体裁で作られている。同義の漢
字による連文の熟語が多いことも漢文を読むうちに自然と身につき、

自作の文章を作る際にもそのような同義、類義の和語を組み合わせ
て使い、自ずと翻訳的文体が形成されるのであろう。『源氏物語』
においても、漢語・漢字の知識を踏まえた同義的結合の複合動詞や
並立形容詞を多く用い、さらにこれに応用し並列的・対偶的な句表
現が多用されたと推測される。このような『源氏物語』の翻訳調と
も言える表現は、本稿でいくつかの具体例に示したように、漢語の
語形やその意味用法を踏まえつつ、自ら創作しようとする物語の文
脈に応じた和語表現に応用した結果であると考えられる。

六 まとめ

『源氏物語』では『白氏文集』の影響による箇所が多く指摘され
ている。本稿で取り上げた複合動詞や動詞句・形容詞句にも、『白
氏文集』等の影響で用いられた漢語の翻読語が含まれ、また、作者
が漢語的な発想で創作した例も多く含まれていると推定された。同
義的結合・類義的結合の複合動詞・動詞句は、和文体の文章に漢文
的発想の語や表現を巧みに溶け込ませようとしたものであり、『源
氏物語』の文体の一特徴を見出すことができる。

『源氏物語』の翻読語の例は従来部分的に指摘されていたが、本
稿では該当する複合動詞の候補を包括的に提示した。これらがどの
ような漢文・漢語を踏まえて成立したのか、『源氏物語』の語彙や

表現・文体の観点からさらに詳しく検討すべきである。

注

- ① 翻読語とは、奥村(一九八五)が『漢文の構成の形のまま、国語に直訳し出したる』、『元來本邦には存せざりし語又は語法』のことを、それが必ずしも『漢文の訓読の為に按出せられしもの』とは言えず、翻訳を契機として、外国の——具体的に言えば中国の——未知の事物を表すために借用された表現形式」とするものである。ここでは漢語に多い「連文」によるものを扱った。連文とは「一義ヲ通有セル二箇、又ハ稀ニ二箇以上ノ文字ガ、其ノ一義ヲ紐帶トシテ結合」(湯浅廉孫『漢文解釈に於ける連文の利用』朋友書店)した熟語である。したがって、連文に基づく翻読語では同義かいなかの判断は和語でなく、元になった漢語の字義で考える必要がある。

本稿では翻読語の候補として同義的結合と推定される例の漢字表記を示したが、どのように漢語表現と対応するかについて、今後さらに検証すべきである。

- ② 長単位検索によると、末尾に「給ふ」「聞こゆ」「奉る」「侍り」「す・さす」などの敬語補助動詞や助動詞が付く場合があるが、これらを除いて「動詞+動詞」の複合動詞になる例を抽出した。また、前項動詞と後項動詞の間に「す・さす」「る・らる」「聞こゆ」「奉る」「給ふ」などの敬語補助動詞や使役・受け身の助動詞が介在する例があるが、これらを除いた形で「動詞+動詞」の複合動詞として数えた。接頭辞的な「うち」「もて」は複合動詞の前項として数えた。

なお、全48語の中で、『源氏物語』のみに見られる例196語(46%)、語彙表にない例675語(16%)であり、独自例が半数以上を占める。

- ③ 漢語が動詞的なものが多いのに、『源氏物語』では「かなし」の並立形容詞が多く、「かなしむ」による複合動詞が少ないのは、動詞「かなしむ」の文体的な制約が背景にある。語彙表によると「かなしむ」は漢文訓読文に例が多いが、平安和文では『源氏物語』『紫式部日記』以外に見られない。

参考文献

- 奥村悦三(一九八五)「和語、訓読語、翻読語」(『萬葉』121)
 武田祐吉(一九三四)『源氏物語に於ける対偶意識』(『国文学論究』)
 橘誠(一九七八)『源氏物語の語法・用語例の一考察——形容詞語彙の対偶性・並列性——』(『滋賀大國文』16)
 中西進(一九九七)『源氏物語と白楽天』(岩波書店)
 藤井俊博(一九八九)『続紀宣命の複合動詞——漢語との関係を中心として——』(『国文学論叢』34)
 藤井俊博(二〇〇三)『今昔物語集の表現形成』(和泉書院)
 藤井俊博(二〇一六)『院政鎌倉期説話の文章文体研究』(和泉書院)
 藤井俊博(二〇一八a)『万葉集』における連文の翻読語——「春ざりくれば」「春されば」の解釈に及ぶ——』(『人文学』202)
 藤井俊博(二〇一八b)『連文による翻読語の文体的価値——「見れど飽かず(飽き足らず)の成立と展開——』(第一二〇回国語語彙史研究会)於京都大学 平成三〇年二月八日の口頭発表)
 松浦照子(一九七八)『かなし』を中心とする感情形容詞の一考察——『源氏物語』を資料として——』(『国語学研究』18)
 山口仲美(二〇一八)『源氏物語の並列形容詞』『言葉から迫る平安文』学1 源氏物語(風間書房)